A0（ゼロ）サイズまで印刷可能！
長尺プリンター印刷サービスのご紹介

これまで本学の教育活動を支援するために、教職員対象に大判サイズのポスター印刷のサービスを提供してまいりました。この度、機器の更新に伴い、A0サイズまで印刷が可能となりました。

授業でのポスター発表やイベントの周知など、幅広くご利用いただけます。新しい機器でのサービス提供は、2025年1月中旬より開始しています。詳細はkwicのお知らせをご確認のうえ、ぜひご利用ください。

高等教育のみちしるべ

関西学院大学
高等教育推進センターニュースレター Vol.26

発行日：2025年3月31日
発行者：関西学院大学高等教育推進センター

HP https://www.kwansei.ac.jp/highedu
E-mail HighEdu@kwansei.ac.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
FD講演会・研修会等の依頼も歓迎いたします。

高等教育のみちしるべ

関西学院大学
高等教育推進センター
ニュースレター
Vol.26 [2025.3.31]

TOPICS

Best Contribution賞
～ボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室に授与～

特集
～関西学院高等部の大学教育への期待～

よりみちコラム
～まずは自分が授業という場を楽しむこと～

目　次

CONTENTS

センターの紹介
発行挨拶 2
Best Contribution賞 3
FD・SD講演会
FD研修会講師派遣情報 4
FD活動報告（学部・センター等、研究科） 5
新任教員研修年間報告 7
授業調査年間報告 8
事業報告 9
特　集 10
よりみちコラム 11

センターの紹介

CENTER INTRODUCTION

本センターは、教育力を強化し、教育の質を高めることにより、本学の教育の一層の充実・発展に寄与することを目的として、次の事業を行っています。

1　本学の教育力向上に資する全学的方針の立案および活動の企画・運営
2　教職員による自律的な教育改善コミュニティー形成の支援
3　高等教育に関する政策動向等の調査・研究
4　学習支援システムを活用した教育の開発・支援
5　TA・LA等の教育・指導力向上の支援に繋がる活動の企画・運営
6　センター紀要、資料等の発行
7　その他必要な事業

発行挨拶

PUBLICATION GREETINGS

ニュースレター第26号をお届けいたします。今回の巻頭特集では「Best Contribution賞」について取り上げています。南海トラフ地震の発生を見据え、大学教育においても防災啓発活動・講座などの実施・充実の必要性が高まっています。このような中、今回の「Best Contribution賞」では、阪神・淡路大震災の後より、一元化された被災地でのボランティア活動の実施と大学による活動支援の体制の整備を進めておられますボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室の活動について顕彰させていただきました。同センターは、2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災者の方々への支援活動を継続的に行うなど、1995年の大震災以降、途切れることなく多くの学生たちへ社会参画の機会と学びの場を提供されています。また、以上の活動を支える土台として、教職員のみならず学生たちが自らの活動を自律的にコーディネートできる組織体制を適切に構築されています。次に、特集記事では、社会構造の変化、グローバル化やAI技術の向上などの技術革新の進展などを踏まえ、「高等部教員から見た大学教育に期待すること」をテーマとして、高大接続（高校と大学の教育内容の接続）の視点のもと、本学高等部の先生方からいただきましたご意見を紹介いたします。そして、「よりみちコラム」では、着任2年目の本センター岩田専任講師の若手教員としての授業運営の苦労や改善内容、授業者としての成長の様子について掲載しています。また、昨年度に引き続きまして、大学・大学院FD部会でのご意見をもとに開催しましたFD・SD講演会、新任教員研修会（年間）、授業調査など本センターの活動についても報告しております。

最後になりましたが、前号の25号より「みちしるべ」という新しいタイトルのもとデザインを刷新し、紙面をリニューアルいたしました。学内外の読者の皆様にとって今後の働きの一助となれますよう、忌憚なくご意見をいただけましたら幸いです。来る2025年度も、ご協力とお力添えをお願いいたします。

高等教育推進センター長
小谷　正登

Best Contribution賞

2024年度「高等教育推進センターBest Contribution賞」ボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室へ授与

高等教育推進センターが、本学の教育力向上に貢献した個人・団体を顕彰するBest Contribution賞を、2024年度はボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室に授与し、クリスタルトロフィーを贈呈しました。

受賞コメント

ボランティア活動支援センター　今津屋直子センター長コメント

名誉な賞を賜り、光栄です。ヒューマン・サービス支援室の活動に加えて、専従ボランティアコーディネーターや学生コーディネーターを含む組織運営や、学生の主体性や自律性を重視した支援に対しても評価していただき非常に嬉しく思います。これを機にさらに多くの方々に関心を持っていただきたいと思っています。

ボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室の概要

関西学院大学ボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災を契機に設立されました。震災直後に救援ボランティア委員会が発足し、学生や教職員が協力して救援活動を行いました。この活動が基盤となり、同年4月に関西学院ヒューマンサービスセンター（HSC）が正式に設立されました。

学生にボランティア情報を提供し、活動の紹介やサポートを行っています。災害支援や地域貢献活動など、多岐にわたるボランティア活動を推進し、学生の社会貢献意識を高める役割を担っています。

顕彰のポイント

ボランティア活動支援センター／ヒューマン・サービス支援室の諸活動が、本学のスクールモットーであるMastery for Serviceを組織的に体現しており、またそれらが学生の自主性に基づく形で組織化・展開されている点です。また昨今の高等教育では、正課のみならず正課外教育とのバランスの取れた総合的な学習環境が求められており、ボランティア活動支援センターの諸活動は本学の学習環境の質の向上に貢献している点で高く評価されました。

具体的な取り組み

（1）学外への学生派遣を通した教育活動の充実

毎年学外でのボランティア活動を実施し、本学学生がキャンパスを飛び越えて被災地等で学ぶことのできる場を提供しています。例えば、2024年1月1日に発生した能登半島地震の被害者を支援するために、これまで計4回の現地でのボランティアを実施しています。2025年2月14日からは第5回ボランティア活動を実施予定で、これらは1995年の阪神淡路大震災発生以降、途切れることなく継続的に行われており、多くの学生たちにとって社会参画及び学びの場として機能しています。

中央左から順に、
今津屋直子センター長、関嘉寛ヒューマン・サービス支援室長、
岡秀和専従ボランティアコーディネーター

（2）ボランティア活動を通した学びを深めるための組織体制の構築

ヒューマン・サービス支援室では、単に教職員による室長・副室長等の人員配置を行うだけでなく、専従のボランティアコーディネーターを3名雇用し、様々な情報提供やボランティア活動の運営を行っています。また、学生コーディネーターの制度を設計し、学生が主体的に自分たちのボランティア活動を紹介・発信しイベントを行うなど、積極的に活動を行っている。春には団体紹介冊子を発行、ボランティアEXPOに参加し参加者募集を行い、夏にボランティアツアーを実施し、冬にはボランティアWeekを開催するなど、普及活動にも力を入れています。これらの活動を支える土台として、教職員のみならず学生たちが自分たちの活動を自律的にコーディネートする組織体制が適切に構築されています。

2023・2024年度 FD・SD講演会

■第20回高等教育推進センターFD・SD講演会

開催日時：2024年3月21日（木） 15:00～16:30
開催形式：オンライン
講　　師：木村 拓也氏（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 教授）
主　　題：「大学入学者選抜の過去・現在・未来」

大学入学者選抜制度をテーマにご講演いただき、学内外から123名の参加がありました。日本の大学入試とその課題をはじめ、多面的な評価の必要性等について詳しくご解説いただき、参加者から多数好評の感想をいただきました。

■第21回高等教育推進センターFD講演会

開催日時：2024年9月4日（水） 13:00～14:30
開催形式：対面・オンライン（Zoom）ハイブリッド開催
講　　師：成瀬 尚志氏（大阪成蹊大学 経営学部 准教授）
主　　題：「レポート課題を再検討する
ーねらい・論題・評価の新たな視点ー」

レポート課題の効果的な出題方法についてご講演いただき、学内FD講演会として45名の参加がありました。参加者にとって、レポート課題のあり方について整理し再考する貴重な機会となりました。

■第22回高等教育推進センターFD・SD講演会

開催日時：2024年12月12日（木） 14:30～16:00
開催形式：オンライン
講　　師：島田 恭子氏（一般社団法人ココロバランス研究所 代表理事）
主　　題：「カスタマーハラスメントへの対応方策と
組織的体制について」

学内教職員を対象に、学生・保護者、地域住民等への対応におけるカスタマーハラスメントの考え方や対処法、注意点などご解説いただき、93名の参加がありました。

個人ではなく組織で対応することの重要性やコミュニケーションスキルなど、実践的な対処法を学ぶことができたと参加者から感想をいただきました。

■第23回高等教育推進センターFD講演会

開催日時：2025年2月21日（金） 10:00～11:50
開催形式：オンライン
講　　師：松下 佳代氏（京都大学大学院教育学研究科 教授）
主　　題：「ミネルバの視点から汎用的能力の育成を再検討する」

ミネルバ大学がいかにして汎用的能力を育成しているかをご解説いただくとともに、その視点から日本の大学教育を再検討することで今後の指針を示していただきました。学内外から203名の参加があり、汎用的能力の育成について大変分かりやすく、またミネルバ大学が狙う点も非常に理解できたなど好評の感想をいただき、有意義な講演会となりました。

■第24回高等教育推進センターFD・SD講演会

開催日時：2025年3月6日（木） 15:00～16:30
開催形式：オンライン
講　　師：天野 由貴氏（帝京大学 ラーニングテクノロジー開発室 講師）
主　　題：「教職員のための著作権の基礎」

大学ICT推進協議会発行「すごくわかる著作権と授業」の内容を中心に、教育者が知っておくべき著作権の基本概念と授業における著作権利用についてご解説いただき、68名の参加がありました。普段授業を実施している中で、著作権に関して疑問に思う点が多く整理されて説明され、大変参考になりましたと参加者から感想をいただきました。

※本講演は、一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会（SARTRAS）の助成を受けた大学ICT推進協議会（AXIES）の講師派遣事業を活用して実施しました。

2024年度の学部・研究科FD研修会への講師派遣情報

高等教育推進センターでは、各学部・研究科のFD研修会に講師を派遣しています。2024年度は生成AIをテーマとした講師派遣依頼が多く、またLUNA（LMS）を活用した教育支援方法やルーブリックに関する研修会を実施しました。

これらのテーマに限らず高等教育推進センターでは、FD研修会に関する情報提供を行っています。FD研修会実施にお困りの際は、高等教育推進センターまでご相談ください。

テーマ LUNAを活用した効率的な教育・学習支援方法
日　時：2024年7月10日（水）15:10～16:10
学　部：教育学部
講　師：岩田 貴帆・武田 俊之・
時任 隼平（高等教育教育推進センター）

テーマ FD研修会：大学教育と生成AI
日　時：2024年7月17日（水）18:00～19:00
学　部：司法研究科
講　師：武田 俊之
（高等教育推進センター 教育技術主事）

テーマ FD研修会：大学教育における人工知能の利用とその課題
日　時：2024年7月24日（水）15:10～16:10
学　部：国際学部
講　師：武田 俊之
（高等教育推進センター 教育技術主事）

テーマ FD検討会：生成AIについて知っておくべきこと
日　時：2024年9月11日（水）16:00～17:30
学　部：関西学院短期大学
講　師：武田 俊之
（高等教育推進センター 教育技術主事）

テーマ SD・FD研究会：授業内外の多様な学習を評価・促進するルーブリックの基礎知識
日　時：2024年11月21日（木）15:10～16:50
学　部：国際連携機構
講　師：岩田 貴帆
（高等教育教育推進センター 専任講師）

テーマ 教員を対象とするハラスメント防止研修会
日　時：2024年10月～2025年3月
学　部：全学部、研究科
講　師：高島法律事務所

2024年度 学部・センター等FD活動報告

誌面の都合上、一部の学部・センター等、研究科のFD活動報告を掲載しています。
全てのFD活動報告は、右記QRコードよりご確認ください。

教育学部 FD活動報告

本年2024年度の教育学部FD研究会は、7月10日（水）と12月11日（水）の2回実施された。7月10日（水）の第1回は、「LUNAを活用した効率的な教育・学習支援方法」をテーマとして、講師は高等教育推進センターの岩田貴帆専任講師にご担当いただき開催した。授業者の負担を軽減させつつ、学生の学びを促進していくことについて、講師の岩田先生等の授業を事例としてご紹介しながら情報を提供していただいた。LUNAの操作方法の話は最低限にとどめつつ、ICT活用に関する一般的な枠組みを用いた話題も含めて、今後の教育学部における学生の学びを大いに促進するに十分な意義ある学びの場となった。

12月11日（水）の第2回は、「ハラスメント防止研修（教員対象）」をテーマとして、荒井雄一弁護士（高島法律事務所）を講師に開催した。ハラスメントに関する研修の必要性から、ハラスメントの類型、行為者になった場合の責任、そして事例検討に及ぶ内容であった。具体的な事例を通してハラスメントを身近な問題として捉え、防止への意識を高める機会となった。

国際学部 FD活動報告

国際学部のFD活動は、①FD研修会（国際学研究科との合同を含む（以下、院合同））、②学部授業に対する学生インタビュー調査（院合同）、③上記の2つと関連する学生のための教育改善及びキャリア支援の3つで構成されている。2024年FD研修会は第1回「研究演習特例措置の運用について」（5月8日教授会内実施、院合同）、第2回「生成AIの活用について」（7月24日実施、院合同）、第3回「国際学部の今後のカリキュラムについて」（9月11日実施、院合同）、第4回「ライフデザインについて（進路情報意見交換会）」（10月23日実施、院合同）をテーマとした。さらに第5回は「教員対象ハラスメント防止研修」（11月27日実施、院合同）を外部の弁護士の先生を招聘し開催した。

FD研修会第1回目では、一年間の長期交換留学などで3年次に研究演習1を受講できない場合の学生指導のあり方を議論した。第2回目では、教育現場における生成AIの活用について、外部講師を招聘し、学生がどこまで利用することを是とするのか、またアカデミック・インテグリティの点から問題はないのかなどを議論した。

第3回目では、学生からの授業への聞き取りを行い、教員の側や学部での対応で改善できるところを議論し、今後のカリキュラムに活かしつつも、現行の国際学部カリキュラムを維持することになった。第4回目では、キャリアセンター担当者より2023年度（24年卒）の就職状況、2024年度の動向等の説明と、それを受けた情報交換が行われた。

共通教育センター FD活動報告

当センターは2010年4月の設置以来、FDに関する主たる取り組みとして、全学科目体系の整備、初年次教育科目「スタディスキルセミナー」の提供、ラーニング・アシスタント（L.A.）制度の運用を推進している。

カリキュラム充実のための活動として、「AI活用人材育成プログラム」の運営および、ライティングセンター開講科目の運営が挙げられる。それぞれ専門の部会を設置し、定期的にカリキュラムの内容や開講形態について検討を実施している。ライティングセンターでは、スタディスキルセミナー（グループワーク入門演習）と（リポート執筆の応用演習）を新設し、より体系だった履修が可能となった。

また、シラバスの高度化・実質化に関する取り組みを継続し、高等教育推進センターと共同で作成した『授業シラバス執筆の手引き』を基に、センター提供全科目のシラバスについて、センター長、センター副長、情報科学科目コーディネータ教員、関係教員でチェックを行った。

これらに加え、センター所属の教員に対し、9月13日・27日に、研究倫理の啓蒙（研究活動上の不正行為、研究費の不正使用の防止について）をテーマとした、コンプライアンス教育を実施した。

研究科 FD活動報告

◆総合政策研究科◆

総合政策研究科では、FD・カリキュラム検討委員会においてFD活動などに関する議論を適宜行っている（研究科執行部会である学部長室委員会でも再度検討）。2024年度における研究科の主な活動は以下の通りである。

（1）FD研修会を計3回開催した（学部と共催）。本年度は、Slackの活用方法について、教育・研究におけるコンプライアンスに関する理解の促進、シラバスの作成に関する理解の促進とシラバスの教員間での相互評価・相互チェックの実施などであった。

（2）各教員の研究内容の紹介等を目的とした研究発表会を計4回実施した（学部と共催）。

（3）国連システム政策専攻の開設に伴う、総合政策専攻（2025年度以降入学生用）のカリキュラムの見直し（履修モデル・教育課程表・科目新設や廃止等の見直しなど）を行った。

（4）国連システム政策専攻の開設に向けて、研究科の各種制度の見直しを行った。

（5）国連システム政策専攻の教務事項について、主にカリキュラム（履修モデル・教育課程表・新設科目の授業設定など）、インターンシップ制度に関する検討を行った。

◆言語コミュニケーション文化研究科◆

言語コミュニケーション文化研究科では、毎年、秋学期にFD活動の一環として、研究科執行部と大学院学生代表によるFD研修会を開催している。今年度は2025年1月14日に対面で開催した。執行部教員4名、学生5名の出席を得て約90分意見を交換した。

学生側は、事前に本研究科に在籍する学生にアンケートを実施しており、それに基づいて、様々な要望が述べられた。その中には、西宮上ケ原キャンパスの5時限の授業と大阪梅田キャンパスの6時限の時間帯が重複しており、双方を履修したくても不可能であったという意見があった（本研究科では大阪梅田キャンパスでも6・7時限に講義を開講している）。その他、検定試験受験に対する補助金や研究用図書の充実、学生同士の交流機会の充実などについての要望が出された。大学全体の設備などについての要望もあった。教員側からも、実現が難しい要望もあるが、可能なものについては対応していく旨の返答があった。

院生からの要望は研究科委員会でも報告しており、今後の教育・研究環境の改善に生かされる予定である。

◆司法研究科◆

司法研究科長を含む4名の教員からなる「自己評価・FD委員会」を原則2カ月に1回開催。以下のFD活動を実施した。

（1）授業評価：学生による授業評価アンケート及び教員による自己評価を各学期終了間際に実施した。報告書を作成し、全体概要を研究科HP上にて公開、科目ごとの詳細データを教職員・学生に公開した。

（2）授業参観：春学期に対面での授業参観および受講生との懇談を行った。その後、参観教員と授業担当教員との間で意見交換を行い、授業方法等の改善を図った。

（3）中間アンケート：学生アンケートを授業第5週目にオンラインで実施した。これは授業評価とは違い、後半の授業運営に向けて即時的な改善を狙った取組であり、アンケート結果を即座に担当教員に提示し、対応を検討いただく。

（4）FD研修会：研究科の教育力向上を目的として、全専任教員を対象に計5回のFD研修会を実施した。

①［春学期］授業参観と統合して実施することで、授業参観を通じた事前の分析・検討を踏まえたより活発な意見交換をはかり、さらなる授業改善に向けた議論を行った。

②［春学期］高等教育推進センター 武田俊之教育技術主事による講演会を開催した。

③［春学期］神戸大学と連携した共同FD研修会として、大阪大学大学院高等司法研究科 片桐直人教授による講演会を開催した。

④［秋学期］キャンパス自立支援室スタッフによる講演会を開催した。

⑤［秋学期］高等教育推進センター派遣の弁護士によるハラスメント研修会を開催した。

2024年度
年間を通した新任教員研修について

2024年度も、年間15時間の新任教員研修プログラムを実施しました。
プログラムの主な内容は表1の通りです。

表１　主たるプログラム内容

時　期	プログラム内容	実施形式
春	講演『関西学院のミッションとビジョン』	対面
	講演『大学人としてのスキル－教育研究以外の側面を中心として』	対面
	講演『本学の教育活動について』	対面
	講演『各種データから見る本学学生の特徴』	対面
	講演『ハラスメントの予防と対応について』	対面
	講演『大学での合理的配慮と学生相談について』	同時双
	講演『教員と学生のメンタルヘルス』	同時双
	講演『本学の授業実践事例紹介』（Q&A あり）	同時双
	紹介『本学の様々な学習リソースについて』　など	同時双
	実習『LMS の基本操作』	対面・同時双・オンデ
	解説『研究支援及び研究倫理等に関する取組と安全保障輸出管理について』	オンデ
	解説『大学図書館の選書と利用について』	オンデ
夏	講演『IR データから見る学生の学びの実態』	同時双
	ワークショップ『授業省察ワークショップ』　など	同時双
	講演『レポート課題を再検討する』	対面・同時双
	解説『シラバスの書き方に関する再確認』	オンデ
冬	講演『ミネルバの視点から汎用的能力の育成を再検討する』	同時双
	講演『教職員のための著作権の基礎』	同時双
	ワークショップ『教育におけるルーブリックの設計と利用』	同時双
	ワークショップ『深い学習を促すアクティブラーニング型授業』　など	同時双

（対面：会場、同時双：ZOOM、オンデ：オンデマンド）

昨年に続き、春期・夏期共に研修後のアンケート結果は概ね良好でした。例えば、春期に実施した『大学での合理的配慮と学生相談について』では、「合理的配慮、メンタルヘルスに関しては具体性がある内容で有意義だった。」など肯定的な意見が複数ありました。また、『本学の授業実践事例紹介』や『LMSの基本操作』については、「授業実践事例紹介をしていただき、LMSの効果的な活用方法を学べたことが参考になりました。」や「授業が目前に迫っているので、LUNAや図書館などの情報が特に役立ちました。」などの意見がありました。

夏期研修については、『授業省察ワークショップ』について受講者から「オンライン上ではありましたが、新任教員同士で自分たちの経験や悩みを共有できたのは大変良かったです。」などの回答がありました。また、『IRデータから見る学生の学びの実態』については、「IRデータを通して、関学生の現状について、より詳しく知ることができたことです。特に留学関連の現状を把握することができて勉強になりました。」などの意見が寄せられ、アンケートの集計結果も良好でした。

プログラム全体については、「プログラムへの参加方法が選べる点が良かった。」など参加形式の選択肢を設けたことに対する肯定的な意見がありました。それ以外に、研究費に関するプログラム追加のリクエストやご意見がありましたので、より良いプログラムの実施に向けて参考にさせていただきます。

授業調査年間報告

学修行動と授業に関する調査 年間報告

2024年度春・秋学期の授業調査は、原則すべての開講科目を対象としてWeb 方式で実施しました。学生への回答周知等にご協力いただきありがとうございました。

Web方式は授業調査専用システム「FDマネージャー」を用いて、実施しました。春学期調査対象科目のうち学生から回答があった科目は、全体の80.9%（2023年度春学期84.7%）、秋学期は全体の68.1%（2023年度秋学期68.6%）でした。

本調査の目的は、①学生の学修行動・成果の振り返り、②授業担当者による次年度以降の授業内容や授業方法の改善の促進、③授業環境について組織的な改善に結びつけること、の3点です。なお、各学部・センターのFD活動の一例は高等教育推進センターホームページの「FD活動報告」をご覧ください。

次年度も引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

昨年度に引き続き学生の回答促進を目的に、
授業調査実施や結果に関するポスターを掲示しました。

＜実施期間＞
◆春学期
2024年 7月 1日（月）～ 2024年 7月19日（金）
◆秋学期
2024年12月13日（金）～ 2025年 1月 9日（木）

大学院における「学生による授業評価」 年間報告

本調査の結果は各研究科にて集計・分析を行い、総評としてまとめ、今後の授業改善や教育内容・環境整備に役立てていきます。本センターとして、授業評価をはじめとするFD活動を各研究科と連携し、今後より一層進めて参ります。なお、各研究科のFD活動の一例は、高等教育推進センターホームページの「FD活動報告」をご覧ください。

次年度も引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

＜実施期間※＞
◆春学期
2024年 6月21日（金）～ 2024年 7月19日（金）
◆秋学期
2024年12月 6日（金）～ 2025年 1月16日（木）
※一部の研究科では、独自日程で実施

事業報告

大学院生を対象としたプレFDプログラム実施報告

本学では2024年度より、大学院生（博士課程後期課程）を対象に「プレFDプログラム」を開始しました。プレFDとは、本格的に大学教員としてのキャリアをスタートする前に、授業を実施するために必要な知識・スキルを身につける研修プログラムです。夏に第1期として「基礎編」を、冬に第2期として「基礎編」「応用編」を実施しました。本センター岩田貴帆専任講師が講師を担当しました。

応用編（ワークショップ）での模擬授業の様子

基礎編は、高等教育の現状や授業設計に関する基本的知識を学ぶ講義動画（計4時間）を受講するプログラムです。第1期は10名の受講生のうち8名、第2期は11名の受講生のうち10名がワークシートを提出し、修了証を授与されました。「教壇に立つ前に少し自信が持てました」「授業を担当する場合に、どんなことを考慮するべきか勉強できてよかった」と好評でした。

応用編は対面ワークショップ形式で、2025年2月12日に実施しました。模擬授業を実施し、相互にフィードバックしながら授業力を実践的に高めていき、6名に修了証を授与しました。「模擬授業のあとすぐにフィードバックをもらえてよかった」「他の人の模擬授業を通して自身の改善点にも気づけた」「アクティブラーニングの効果も体感できた」といった感想から、実際に教室に集まったからこそ得られたものがあったことがうかがえます。

2025年度以降も継続的に実施していく予定です。ご興味をお持ちの大学院生の方は是非ご受講ください。

指導補助者（SA/LA/TA）研修実施報告

本学では、様々な授業で学生による指導者補助が行われています。この度、指導補助者を対象にオンデマンド研修を実施しました。動画には、職種によって授業中に求められる役割が異なる点や、授業中の基本的業務、教員や受講生との基本的なコミュニケーションに関する留意点等が含まれています。授業研修動画視聴後には、LUNA（LMS）を用いた内容理解確認テスト（選択問題等）を行いました。680名が受講し、受講期間終了までの完了率は79%（536名）でした。

今後は、配慮が必要な受講生とのコミュニケーションに特化した研修教材の制作を予定しています。指導補助者のより良い授業補助が実現できるように、引き続き研修体制の充実を検討していきます。

＜受講期間＞
2024年9月17日～9月29日（確認テスト受講を含む）
＜受講完了者＞ 536名（全680名のうち） **＜完了率＞** 79%

特　集

関西学院高等部の大学教育への期待

関西学院大学を含めて「**大学教育全般に期待すること**」について、小谷正登高等教育推進センター長と同センター岩田貴帆専任講師が、もっとも身近な高校である本学院高等部の枝川豊高等部長にお話を伺いました。

小谷－高校の先生方が、大学教育にどのようなことを望んでおられるか、ご意見をお聞かせください。

枝川－本校を含め、多くの高校はいま、探究型カリキュラムを充実させていこうとしています。そういった探究的な学びを大学に行っても自然に継続できるような、そういう教育体系の大学であればありがたいなと思います。もちろん、各学部の専門知識をしっかり学ぶことは重要で、むしろそこがないと探究型の学習はできないので知識・技能習得は必要です。それだけに留まらず、高校で培ってきた探究型の学習を大学においても継続して、ひいては研究に繋げていくことを期待しています。

小谷－なるほど。御校では例えば具体的にどのような探究活動をされていますか。

枝川－探究に関して、1年生から3年生まで全学年で、いわゆる教科の授業とは別で、探究活動を中心とした授業が選択できるようになっています。大体、学年のうちの3分の1ぐらいの生徒が探究を選択しています。探究型カリキュラム委員会を設けて、家庭科や体育科も含むいろいろな教科の教員が垣根を越えて、共同で授業を作っています。今、約半分程度の先生が関わって、探究型の授業の作り方といったノウハウを蓄積しています。さらに、部活動や修学旅行についても探究的な学びを育成する場であると捉えて、全生徒が何らかの形で探究学習に関われるようにしていきたいと思っています。

岩田－部活動も探究的な学びを育成する場として捉えるというのは大変興味深いです。大学生でも授業外で様々な活動に取り組んでいますが、そういった経験が成長に繋がるには、探究的なマインドが必要と感じます。高校の時からそういった視点があれば素晴らしいですね。

小谷－探究の最終的な成果は3年生のときに執筆をする論文になるわけですか。

枝川－はい。今、そのために図書館も探究の中心となる機能を持てるようにしていますし、読書科の授業を中心に情報収集やアカデミックライティング教育などとも関連付けていきたいと思っています。こういった探究学習の成果を、大学の推薦入試や面接でプレゼンなどを通して評価していただけるようになれば、高等部の教員や生徒ももっと意識的に探究学習に関わっていけますし、ひいてはこれが大学での学びにつながっていくという意識も強くなると考えています。

小谷－生徒たちを大学に送っていく高校の先生として、どういう大学なら送りたいと感じますか。

枝川－大学で4年間過ごした後、社会人になって何年かたったときに、大学での経験が仕事に直接つながっていなくても、自分の生き方にとって間違いではなかったと思えるような大学ですね。やっぱり人生のいろんな意味での気付きを与えてもらって、礎をつくってもらえたという実感が持てることが大事だと思います。

そういう意味では関学ってやっぱり、卒業生が卒業後もキャンパスにみんな集まりますし、関西学院という名前を聞くだけでみんな寄ってくるのは、そういう学校だからだと思います。やっぱり最終的には卒業していった子が何年かたって自分を振り返ったときに、間違いじゃなかった、確かだったと思える教育をしてもらった、課外活動も含めてそういう経験ができたと思える大学であれば、行ってこいってなるのではないかと思います。

岩田－そのために大学がどういうふうにしていけばいいのか、なかなか具体的に考えにくいところではあると思いますが、たくさんの選択肢を学生のために用意しておくということが非常に重要かと思います。その中でいろんなものと出会って、そこで人間的に発展して、それで数年後にあそこでの出会いが自分を支えてくれたみたいなことがあると思います。

枝川－大学の先生も、昔だったらよくチョーク1本、これで勝負するんだって、そういう先生はいました。今でもそれはありだと思いますが、一方でICT機器も使いながら、小学校から高校までの学びのスタイルが変わっていることも踏まえた授業を大学の先生にもしていただきたいと思います。

講義形式も大事だし、さっき言った知識注入も絶対に大事だと思います。それをベースにしつつ、インタラクティブに学生同士のディスカッションを取り入れるとか、それを見て評価したり、フィードバックしたりするなど、そういった授業が大学で増えてくると良いなと思います。

昔は、自分の背中を見て学べ、という時代もあったけれども、時代や人は変化しますので、今はそれだけでは十分に伝わらないと思います。きちっと言葉で伝えてあげないと伝わらないと思います。それはある意味、生徒の力の低下でもあるかもしれないですけどね。やっぱりインタラクティブな活動やフィードバックという形で言語化し、きちんと伝えていく形の指導をしていかないと、学問の魅力は伝わらないだろうなと思います。

枝川－いろんな観点と物差しで生徒を見ていただける大学が魅力的だなと思います。昔だったら、高校も大学もペーパーテストだけで点数を付けていました。今は高校では改善をしてきているので、大学でも多角的に見ながら評価していくという観点も持っていただけたら嬉しいです。

小谷－高等部に限らずどこの高校から来る子たちも、必修科目として探究活動を行っているので、その前提の下で幅広い観点で評価しないといけないわけですね。高校の先生のお立場から、大学との関わりとしてどのようなことを希望されますか？

枝川－今、関西学院大学にお願いしたいと思っていることは、これは進路指導の一環ですが、学部選択ですね。大学選択ではなく。そのために各学部に年2回、出前授業のようなことをしていただいて、自分で選択して、行きたい学部を選ぶ。やっぱり生の授業を生の大学の先生の、その先生の専門の授業を聞かせてもらう。そういった機会を年に2度、つくってくれませんかと14学部を回って各学部の先生方にお願いしている最中です。そういった、生徒へのそれぞれの学部はどういう学びをする学部なのかを早くから知ってもらう機会をいただきたいと考えています。

それと大学に合格した子に対して、今、各学部から4月までの期間を使って課題を出していただいています。その課題を今までは高等部の教師が配っていましたが、実際に高等部にお越しいただき、この課題に取り組むことにはどのような意味があり、これが4月から学部でのどういう学びにどうつながっていくかを少しでもお話いただければ有難いと考えています。実際にお願いしたところ、割と関心を示してくださった学部もあります。そういった積み重ねが生徒の大学への関心にもっとつながっていくと思いますので、学部教育の本質的な魅力を生徒に伝え、それが学部選択に繋がることを期待しています。

よりみち コラム

まずは自分が授業という場を楽しむこと

高等教育推進センター 専任講師
岩田 貴帆

専門は高等教育学、教育工学。2015年に同志社大学政策学部を卒業後、教育関係の会社勤務を経て、京都大学大学院教育学研究科にて博士学位取得。2023年4月に本学に着任し、高等教育推進センターにてFD関連の業務に携わるほか、共通教育科目を担当。

私自身の話で恐縮ですが「よりみちコラム」ということで、2024年度に着任2年目を迎え、日々の授業での試行錯誤について、若手教員の一人として記してみたいと思います。とある演習形式の授業で、前年度の1年目は前任の先生の授業スタイルとの違いに悩むことが多くありました。前任の先生はライブ感を大切にし、学生の反応に応じて展開するスタイル。一方、私は学生が高い学習成果を出せるよう計画的に進めるスタイルで、その違いが学生の雰囲気にも影響しているようで、よく言えば真面目、悪く言えば硬い様子になっていました。特に、授業を支援するLA（ラーニング・アシスタント）には「活発さが足りない」と映ったようで、私自身、教室に向かうのが億劫になる日もありました。

そこで2年目は「まずは自分が楽しもう」と意識し、アイスブレイクを増やして自分も一緒になって取り組んだり、雑談を交えながら学生とのコミュニケーションをとったりするようにしました。また、学生同士のグループワークも円滑になるように「このクラスで呼ばれたい名前」をマジックペンで書いてもらう名札を用意するなどの工夫も取り入れました。こうした工夫が少しずつ効果を生み、授業の雰囲気も和らいでいきました。継続して授業に関わってくれているLAにも「こんなにも変わるんですね」と言われるほどに。また、学生同士のディスカッションが活発になったおかげか、グループワーク自体も盛り上がり、多くの学びが生まれていたようでした。自分らしさを大切にしつつ、より良い授業を模索すること、そしてなにより自分自身が授業という場を楽しむことの重要性を実感した2年目でした。